柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401／044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 139 号

多摩丘陵に残る
義経の面影 - 10

長尾の妙楽寺と義経（その２）

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長　松本良樹

義経は 10 月 21 日黄瀬川で兄頼朝と対面を果たしますが、この時兄 全成も来ていることを知らされたことでしょう。義経は医光寺まで出向き、6 歳年上の兄 全成と幼少の頃の不遇な話から、京や平家の状況など、どうして平氏を倒すのか、豪放な父 義朝を持つ二人の兄弟で時間のたつのも忘れ話し合ったに違いありません。

義経には同腹の兄が、もう一人おりました。4 歳上の乙若で、初め園城寺にて出家し卿公（ｷｮｳﾉｷﾐ）円成（ｴﾝｼﾞｮｳ）となり、後白河天皇皇子である円恵法親王の坊官を務めていましたが、頼朝が挙兵すると父である義朝から一字をとって義円と改名します。そして治承 5 年（1181）叔父源行家が尾張で挙兵すると、頼朝の命により援軍としてその陣に参加。墨俣川の戦いで平重衡軍と刃を交え、平家の家人 高橋盛綱と交戦の末 討ち取られたといいます。享年 27 歳。

悪禅師と言われた阿野全成

ところで、全成は高座渋谷で佐々木兄弟に出会ったといいましたが、この兄弟の父は佐々木秀義といい、平治の乱で義朝方について戦い敗れました。近江源氏 佐々木秀義は、母方の伯母が奥州 藤原秀衡に嫁いでおり、秀衡を頼って奥州へ落ち延びる途中、相模国の渋谷重国に引き止められ、その庇護を受け、重国の娘を娶り 5 男の義清をもうけ、20 年も渋谷荘で生活をしたそうです。

渋谷重国は頼朝が平氏打倒の兵をあげる際、平家の家人 大庭景親から頼朝討伐の密事を聞き、長男の定綱を使いに出して頼朝に危急を知らせたとあります。また 4 男佐々木高綱は頼朝から頂いた名馬『生接』（ｲｹｽﾞｷ）で、梶原景季の名馬『磨墨』（ｽﾙｽﾐ）と宇治川で先陣争いをしたことで有名であります。余談ですが日露戦争で 203 高地を攻めた乃木希助は佐々木高綱の末裔とされています。近江に戻った佐々木氏は後に京極氏、六角氏へと繋がって行くことになります。

ここで、全成の生きた時代を振り返って見たいと思います。頼朝の命により北条政子の妹 阿波の局と結婚し、駿河国駿東郡阿野荘（沼津市西部）を領し 阿野全成と名乗ります。そして阿波の局は建久 3 年（1192）頼朝の次男 千幡（後の実朝）の乳母になります。

正治元年（1199）頼朝が逝去し、頼家が将軍職を継ぐと、全成は実朝を擁する舅の北条時政及び義兄の義時と結び、頼家一派（比企能員が後見）と対立するようになります。この結果、先手を打った頼家は武田信光を派遣し、全成を謀反人として捕縛し、頼家の命により八田知家によって誅殺されました。享年 51 歳。全成の墓は沼津市の大泉寺に嫡男 時元と並んで現存し、市の史跡に指定されています。

武家としての阿野氏は時元の系統に受け継がれたが、大した活躍はなかった。その一方、全成の娘は藤原公佐（滋野井実国の養子、実父は藤原成親）と結婚しており、その子実直は母方の全成の名字を称し公家として阿野家の祖となっています。後醍醐天皇の寵愛を受け、後村上天皇の母となった阿野廉子はその末裔であります。廉子は美貌と肉体だけが売り物の女性ではなく、才女で後醍醐帝のよき相談相手だったのではないかと思われます。だからこそ後醍醐が隠岐に流される時も、彼女を手放すことが出来ず配流先の隠岐まで連れて行ったのであろう。建武の親政下においては皇后並みの待遇を受け、建武 2 年（1335）4 月准三后の栄誉によくし、内政にも影響力が及んだと考えられ、恒良親王立太子や、足利尊氏と結託して後醍醐天皇と対立した護良親王（ﾓﾘﾅｶﾞ）の失脚・殺害にも関与したとされます。親政瓦解後は吉野遷幸にも同行して後醍醐を助け、その亡き後は後村上天皇の生母として南朝の皇太后となり正平 6 年/観応 2 年（1351）12 月に院号宣下を受け正平 12/延文 2 年（1357）9 月に落飾しました。正平 14 年/延文 4 年 （1359）河内観心寺で崩御、享年 59 歳でありました。

シリーズ
「麻生の歴史を探る」最終回

下綱騒動と志村弥五右衛門

小島　一也（遺稿）

前稿で王禅寺村（現王禅寺東・西）と増上寺との関わりは、寛永3年（1626）、将軍秀忠夫人お江与の方（崇源院）が死去、お化粧料として増上寺領となり、他の旗本領と違って、助郷やお鷹場の負担は免れていたものの、公儀（幕府）を通しての寺社領への法度は厳しく、代々名主を務める志村家は、その対応に苦しんでいたと先に述べました。

王禅寺村が増上寺領になったのは寛永3年ですが、それから 120 年後の延享4年（1747）の増上寺領は、橘樹郡24ヶ村、都筑郡7ヶ村、他17ヶ村で48ヶ村となっており（市史）村々の支配は複雑になります。そうした中で寛政年間の頃（1789～）、増上寺御霊屋領25ヶ村の肝煎総名主であったのが志村弥五右衛門でした。肝煎とは取り持ち、世話人を意味しますが、この弥五右衛門は志村家先代に子がなく増上寺から養子に入った寺侍で、名字帯刀を許され、その知徳は府内に知られ、公儀（幕府）、増上寺、農民の間に入って信頼を得ますが、この弥五右衛門の特徴は、領内各村々に精通していることで、これを書き留め、折衝に活かし、特筆すべきは、慶長年間、（1596～）に遡って、丹念に増上寺から記録を収集しており、それが現在「志村家文書」として、川崎市の貴重な歴史資料となっています。

この弥五右衛門は増上寺御霊屋領25ヶ村の肝煎を務めながら、王禅寺村名主を務め、子息文之丞（志村家13代）に家督を譲るのが文政、天保の頃（1830）と思われますが、ちょうどその頃起きたのが、増上寺領宿河原村の下綱松「弁財天騒動」でした。

この下綱松は、現多摩区宿河原と長尾、緑ヶ丘霊園の接点にあった老松で、鎌倉時代の縁起（加賀文庫）では、この地は畠山重忠の領地であったことがあり、多摩川はこの松の下を流れ、頼朝のご座船を松の根に繋いだので「下げ綱」の名が起きたとされ、新編武蔵風土記稿は、「相云う、太閤秀吉小田原陣の時、上杉家の兵、この松に綱を下げて丘下に下りし故、かく名付けしと」とあります。地元の伝承には、この松の近くに貧しい百姓が住んでおり、枯れた松の枝を切り、生業の助けとしていましたが、ある夜、夢枕に松の精霊が現れ、「木々朽ちて　公を腐（くさ）さぬ常盤木（ときわぎ）の源氏の縁（ゆかり）なお栄えけり」と由緒を諭されたとの逸話があり、また、ある夜、多摩川の洪水は一挙に宿河原村も襲いましたが、不思議なことに松の根元から白い布が垂れ下がり、老若男女を救ったといい、その折、邪（よこしま）な老婆が白布を持ち去ろうとしたところ、白布はみるみる巨大な白蛇となり、老婆を飲み込もうとしました。村人たちは驚いて松の木の下に祠を建て、白蛇を祀ったのが「松寿弁財天」の始まりで、村人は祠内に白蛇の絵馬を掲げて祀りますが、その絵馬は、当時盛んだった養蚕から、ネズミの害を救う霊験を顕したといい、それはいつの間にか信仰となり、近郷近在は勿論、江戸まで知られ、詣でる人が後を絶たなくなります。

武陽玉川八景に描かれた下げ綱の松

時は太平の世に慣れた江戸時代の末期、多摩川は江戸町民の遊楽の地でした。特に対岸の多摩丘陵の眺望は絶景で、それは当時の「武陽玉川八景の図（下綱松が大きく描かれている）」に見ることができますが、江戸市民には、格好の観光の地となり多摩川と下綱の間には84軒の茶店が軒を連ねたといいます。

前述したように宿河原村は増上寺領（半分は幕府領）で、志村弥五右衛門は肝煎名主でした。従ってこの一連の出来事を克明に記録しています。その内容は、一つには、その賑わいの様子で、84軒の茶店、駕篭屋、武家も詣でたことを述べ、二つには、百姓が田畑を潰し、本来の農業から離脱しないかの心配、三つ目には、茶屋の風紀・金銭取り締まりの配慮ですが、結果的には、弥五右衛門の心配通り、百姓は茶店の拡張に田畑を潰し、茶店には博徒、無法人が横行、土地の若者はお賽銭をわし掴みして、甲州街道の遊び場をのし歩いたといい、天保3年（1832）11月、公儀、増上寺によって84軒の茶店は一軒残らず取り壊され、下綱松騒動の決着となっていきます。

この下綱松の跡は、宿河原の下綱町会の岡の上（100段を数える断崖、途中白蛇が呑んだ御霊泉がある）にあり、その跡には現在小祠が建てられ、堂内には、白蛇弁天像などの絵馬、松寿弁財天絵図が掲げられ、そこには、賽銭箱は盗難のため置かないと記されていました。

参考資料:「語り継ぐ宿河原（宿河原町会）」「世田谷の歴史と文化（世田谷郷土史料館）」「川崎市史」

シリーズ
教育の歩み 第２部

学級の誕生（9）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆改正教育令の功罪◆

生徒の出席率と学習の到達度を基準とする補助金の算出方式は、経営の論理、教育行政の効率化の観点から見ると妥当なものでした。初等教育の教育内容を狭く限定した理由は、民衆の学校ともいえる初等学校では、読み、書き、計算という基礎的能力さえ身に着けさせれば良い。それ以上の能力は、個人がお金を払って修得すれば良い。より高い能力を身に着けるための教育は、政府の補助によってなされるべきではないと、政府も議会も考えていたからです。

読み、書き、計算への初等教育の限定は、一方で評価の円滑化を生み、国家が学校現場を統括する上での、やりやすさに繋がりました。監督官は、先ず在籍する子どもたちの出席日数をチェックします。最低出席日数（開校日数の半分以上）が設定されていて、このラインをクリアしているか否かが、補助金の支給に反映されたのです。この現実は、学校の姿勢を大きく転換させました。学校は、出席状況の芳しくない、すぐに学校をやめてしまいがちな下層階級に属する子どもたちの出席を日常化させ、できる限り学校に繋ぎとめる努力をせざるを得なくなったのです。

いやがる子どもを、強引に学校に引きずってくることも、ありました。

それだけではありません。出欠席のチェックだけでは、読み、書き、計算の教育を本当に受けたのかどうか、教わった内容を理解したのかどうかは分かりません。そのため、監督官による年一度の試験が段階ごとに行われたのです。試験の結果、不合格とされた生徒については、一科目につき 1/3 づつ補助金が減額されたのです。

こうすることで生徒たちの学習到達度が明らかになり、併せて教師たちの教育的力量も明らかにすることが出来たのです。生徒1人1人の成績に補助金額が左右されますから、今まで教師たちに無視されたり、軽視されたりしてきた1人1人の生徒たちに、個々の教師の注意が向かうようになったのです。こうして、出席もままならず、中途で学校をやめてしまいがちな子どもたちの出席を日常化し、読み、書き、計算だけは何としても習得させようという機運が、強まっていったのです。

こうした補助金算出への査定の導入と，査定基準の明確化の結果、どの学校においても同じような教育を受けることが出来るようになり、同じような成果が得られるようになったことは確かでした。その結果、学校に通えば必ず読み、書き、計算が出来るようになり、その点で学校は、一定の信用を得られるようになりました。しかし、こうしたプラス面は認めた上で、このような学校システムには、大きな問題があったことも指摘せざるをえません。ここでは、教師の授業展開の自由度は、ほぼ完全に奪われています。すべてが与えられたマニュアルの通りに教えればよいのですから、この時から約半世紀後に問題になるように、人（教師）をして機械の歯車のような存在に貶めることに繋がったのです。このことは、教師の自尊心を著しく傷つけました。内容面では、地域的特性を認めず、全国的な画一教育が行われる点について、当初から疑問視する声が上がっていたのです。

改正教育令に基づく教育は、徹底した学校経営の合理化を目指したがゆえに、安上がりの教育を実現したプラス面と共に、教師と生徒の自由な学びを徹底的に排除してしまっていたのです。こうした自由の抑圧は、最低レヴェルの獲得は保障すると同時に、大きく伸びたかもしれない子供たちの才能やのびやかな感性の芽を、摘み取ってしまうという大きな過ちを犯していたのです。　（続く）

第11回史跡見学バスの旅 江戸の寺巡り～第1回

11 月6日（水）、47 名の一行で、将軍家の菩提寺とゆかりの深い江戸の寺巡りをテーマに都内を巡りました。まず赤穂浪士で名高い泉岳寺で浪士の墓を見学。かつて王禅寺村の領主であった増上寺では6人の将軍の墓と宝物館を見学、台徳院（2代将軍秀忠）霊廟のミニチュアの大きさに感嘆しました。

午後は6人の将軍を祀る寛永寺で天海僧正が愛した開山堂、5代綱吉や8代吉宗ら6人の将軍が眠る霊廟さらに根本中堂を見学。最後の5代綱吉が実母桂昌院のために建立し、その後幕府の祈願寺とした護国寺では、麻生区真福寺で学生時代を過ごされたという僧侶の案内で寺内を見学、山縣有朋、大隈重信、三条実美ら、明治の元勲の墓に詣で、午後6時定刻に新百合ヶ丘に帰着しました。

護国寺　54 段の階段を上りました。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）

12月　7・14 日（毎土曜日）　**令和2年1月**　12・19・26 日（毎日曜日）

◎開館時間:午前10時～午後3時　（12月 21･28 日、1月 5 日は休館です）

第17回 特別企画展 「江戸時代の道中日記を読む」～ 古文書輪読会の学習の成果から ～

当館主催の古文書輪読会では、旧王禅寺村青戸家に保存されていた『道中日記』2点を寄贈いただき、読み進めています。今回はまだ途中ですが、その内容の一端を古文書解読文に地図や資料を付けて紹介いたします。

寛政10年（1798）の旅は80日余りの大旅行。旅人は毎日どのくらい歩いたの？参詣した寺社はどこ？････私たちの今の旅との違いを実感していただければ幸いです。

期間　10 月5日（土）～2020 年 1 月 26 日（土）

会場　柿生郷土史料館特別展示室

第83回 カルチャーセミナー プーチンのロシアを理解する意外な側面

講師は長年NHKにおいてモスクワ、ウィーン駐在として活動され、また報道番組のキャスターとしても大いに活躍されました。ソ連崩壊の報道で菊池寛賞、ソ連･ロシアの客観報道でモスクワジャーナリスト同盟賞、ロシア文化への貢献でロシア政府プーシキン勲章などの受賞歴もお持ちです。

NHKを定年退職後は、フリージャーナリストとして活動。今年6月に上梓された『希望を振る指揮者～ゲルギエフと波乱のロシア～』は講師の深いロシア理解から生まれた著作で、領土や軍事力ばかりでなく、文化が力を持っていることを知らないとロシアの全体像がつかめないと主張されます。普段あまり接することのない側面もとらえ、日露関係を含めて全体の基本的な構図理解の一助となるお話を頂きます。

日時　：１月２６日（日）　午後１時 30 分 ～３時 30 分

講師　：小林和男氏　（国際ジャーナリスト）

会場　：柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会へのお誘い

柿生郷土史料館では友の会への入会を常時受け付けております。手作り史料館に参画しませんか。

会員には「柿生文化」の送付や各種イベントへの優先受付などの特典を用意しております。この機会にぜひ入会をご検討ください。詳細は直接当館にお問い合わせいただくか、ホームページ http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo をご覧ください。